

series Salamander in the circle

# リ・コンストラクション

第六部

第三十六章

## Lokapala's Marriage

峯村 明

# リ・コンストラクション

## 登場人物

### 36・Lokapala's Marriage

337.

338.

339.

340.

341.

342.

343.

344.

345.

346.

あとがき

奥付

## 登場人物

桧山 健 H & L 財団・財務部門勤務

イリチャ 健の息子・真の魂体

バラム ジャガー

ローカパーラ 世界の守護者

テクトリ 大熊座出身の女

## 36・Lokapala's Marriage

337.

大熊座からの使節団は来た時と同じように騒々しく去って行った。

ローカパーラのいる世界では、どんな具合に時間が流れているのかわからない。そんなものはないのかもしれないし、長い時間が経ったかもしれない。暖かい陽光を浴びて浮いている空中都市のずっと下の方では、相変わらず雨が降り続いている。時折、真っ赤な火花が散るのは火山の噴火、海は荒れて波は逆巻き、大河なのか海なのか、水の流れの幅広い道筋が見えるが、気も遠くなるようなエネルギー感がある。

意識を向ければそれらの音を聞くことができるというが、あまりに恐ろしくてそんな気にはなれないし、長い時間眺めていたいものでもない。替わり映えしない光景にうんざりしてくるのだ。

もしかしたら、もんのすごい時間がたっているのかもしれない、と思う。空中都市は常に太陽の下にあって、昼も夜もない。バラムの「永遠の昼下がり」は当たっていた。

都市の外では、まさか、一瞬のうちに千年が過ぎているなど、考えも及ばない。地球の造山運動を超早送りで眺めていたことになる。

元の世界から持ってきた携帯電話で健を呼んでみたが、繋がらなかった。バッテリーの残りも気になったので、それは一回でやめた。バッテリーも残り少ないはずなのに映像と音声だけは元の世界へ送られているという、わけのわからない状況だったが、それを元の世界で健が受信しているとは思わない。完全に一方通行だった。

左腕損傷の治療中、身動きがとれなかつたイリチヤは、暇にあかせてアニメ映画鑑賞三昧の日々を送った。その時に、少女が異世界に迷い込み、両親が豚に変えられてしまう、というのがあった。ちょっとアレに似てるのかなと思う。まあ、似てるのは異世界に滞在、それだけだったのだが。

魂体であるせいか、生理的欲求というものがない。おなかが空くこともないし、眠ろうと思えばいくらでも眠っていられる。ローカパーラの青い宮殿にはよく外宇宙から訪問者がやって来て、退屈しなかつたし、もてなす人々はみな美しく、洗練されていた。とくに、ローカパーラの周囲にいる女性たちは美しかった。その中にテクトリという女性がいて……

(このひと、ずっと前からいるけど、以前と姿が違うような気がする……)

違うような気はするのだが、では前はどうだったかというと……思い出せない。容姿も性格も、よく思い出せないのだが、べつにそれでも困らないから気にしないことにしている。細かなことが気にならなくなってきたという自覚はある。女性たちはテクトリにかぎらずイリチヤを認識できないので、なにごとも大した問題じゃない、という気持になるのだった。

338.

ローカパーラの在所は宮殿と呼ばれていて、ある日、イリチヤとバラムは奥深くに迷い込んでしまった。なにか目当てがあったわけではなく、きらきら輝くタペストリーやどこの世界のとも知れぬ奇怪な化石を含んだ鉱物のコレクションに気をとられていたのだった。

そこは他の部屋部屋とちょっと違っていた。広い広い空間を仕切る床や壁は淡い青で、なにか花の色を思わせる。冷たい感じはないがメタリックな質感。天井までどれくらいあるのか……五メートルくらい？ おそらく広いが、部屋だ、という印象が強い。床から天井までキャビネットのようなものがきっちり収まっている。

「保管庫とか制御室？ H&Lの法務部の資料室がこんな感じだ」

「そんなとこまで覗いたの？ ゆだんもすきもないな」

「子供向けじゃないからおまえは知らんだろう。ネコは何やったって許されるけど」

「いい子はそういうとこへは入らないんだよ」

先を歩いていたバラムがふと立ち止まった。ぴくり、と耳が動く。

「どうした？」

（——静かに！ ——なにか来る！ ——下がって！）

前方を睨み、毛を逆立て、そろそろと姿勢が低くなっていく。宮殿に来てからこんな警戒したバラムは初めてだ。イリチヤは言われるままそっと後ずさりした。これまで、外から来たどんな訪問者の目にも映っていないという安心感から、すっかり油断していた。宮殿内はいたって平和で、近づいてはいけないエリアとか、警告らしいものは何も受けていなかつたし、まさか内側に危険があるとは思っていなかつた。

武器になるようなものを何も持っていないのに気づいて、舌打ちしたい気分だ。

バラムもそろそろと後ずさりしている。なにかが来る、なにか大きなモノの気配は、一方向からではなかつたのだ。左前方のキャビネットの向こう、右前方の壁のかけ、そして、後方からも——！

しかし——まがりなりにも、ここはローカパーラの宮殿——

「バラム！ 手を出しちゃだめだ！ 相手が何モノか見定めてから——」

「そんなこと言ってる場合か！！ 相手は——巨人だ！！」

いっしゅん体を沈めたバラムが、音もなく跳んだ。キャビネットの向こうから姿を現した巨人に向かって。

そのとたん、

「バラム！！」

「やめなさい！！」

イリチヤと同時に誰かが叫んだ。

バラムの鋭い爪は、巨人の顔を引っ搔こうとしていたが瞬時に引っ込んだ。戦意をなくさせる威厳のある一声だった。巨体の肩をとん、と蹴って一回転して着地する。振り向いてみれば、ローラーパーラがイリチヤと巨人を従えるようにして佇んでいた。

339.

「覚えているか、イリチヤ、転送システムを造ったのは巨人ではないかという……」

「それ、ヒューダーが言ったんだ。そしたら、ダーヴェ先生が、巨人が番をしてる、それならわからないでもない、って」

「うむ——」

冥界を探索中の一一行が休息の折にかわした、ほとんど戯言ではあった。ヒューダーもダーヴェも、本気で言っていたのではなかったが、あの時あの場所に、古代の転送システムの制御機構が存在していたのは確かなのだった。ベネットナッシュがいじりまわして、壊してしまった。

この区画は古い文明が遺したものなのだと、ローカパーラは言った。

「見ての通り、直線だけで構成されていて味も素っ気もない、誰も興味を持たないものだからね、とくに注意喚起などしていなかったのだ。まさかそなたらが入って、そのうえ、彼らを呼び出してしまうとは」

「お尋ねしていいだろうか」、とバラム。「この部屋はいったい、何なのだろう」

「この部屋にあるものは——この惑星上のさまざまな地点を繋ぐ道。かつては、ある地点からある地点へ、いっしゅんのうちに移動することができたのだよ。そういうモノだ」

「あの巨人たちは？ そのシステムを造った本人？」

「いや、彼らはシステムの手入れをし、状態を保っているだけだ」

「保全してる？ では今でも使えるということか！？」

「そうだがね、ただ、扱うにふさわしい者が、今はいない」

「星からの訪問者たちは？」

「システムを惑星から切り離すことはできない。つまりふたつは一体」

「…………」

「なかなか興味がありそうだね。賢いバラム」

「うーむ、まことに、興味深いぞ」

ローカパーラはジャガー相手に延々とそんな話を続けていた。

難しい話はジャガーに任せ、イリチヤは巨人と話ができないものかと考えた。彼らは体の一部が有機体、一部が機械という合成生物なのだった。転送システムは彼らを生み出した文明の最高傑作で、後の世に残す目的もあって、作り主と同じ姿で彼ら、いわゆる守衛も作られたのだという。彼らは身の丈が三メートルある巨人族だったのだ。

「彼らの創造主は、余、あるいはイリチヤ、そなたのような見た目とはかなり違っていた。手足は長く、大きな頭部を持っていた。彼らは知的で、心優しい穏やかな人々だった——」

ローカパーラは夢見るようにつぶやいた。遠い思い出を懐かしんでいるようだった。ジャガーとイリチヤの複雑な面持ちに気づいているのか、いないのか。

「守衛たちはシステムを護っているだけだ。訪問者に害を加えるようなことはない。いや、なかつた、か。挑発も度を過ぎると、彼らも黙ってはいないかもしだれぬぞ……」

バラムに向かって微笑み、ローカパーラは行ってしまった。イリチヤとジャガーは気が抜けたように床にへたり込み、彼の後姿を見送った。

守衛たちもいつの間にか姿を消していた。転送システム制御室は音もなく静まり返っている。

340.

「ローカパーラさまが娘を連れてきただって！？」

テクトリはベネットナッシュの胸倉をつかんで揺すりたてた。彼の頭はぐらぐらと前後に揺れて今にもとれてしまいそうだ。

「そ、そなたがおばさん、ふいといなくなつたと思ったら、女の子を連れて帰つておいでだつたんだよ」

テクトリの歯がぎりぎりと鳴った。そこに込められた思いにさすがのベネットナッシュも怖気づいて、聞かれてないことまでペラペラとしゃべってしまった。

「それがねそれがね、おばさんより若くておばさんより初々しくて、きれいで性格がよさそうなんだよ！！」

「なんだって～」

腹の底から絞り出される唸り声は地鳴りのようだ。

「おのれ～せっかくここまで人間に近づけたのに～！！  いったい何千年かかったことか～！！  いきなり横から出てきてローカパーラさまを誘惑するとは～！！」

「ちがうよおばさん、ローカパーラさまの方から手を……」

「そんなわけがない！！ そんなわけがない！！ あたしというものがいるんだから！！」

ローカパーラの前ではしおらしくしているが、テクトリおばさんは父親に何事か吹き込まれてからすっかり変わってしまった。まあ、無欲だったころの彼女よりはずっと生き生きしているのだけど、すでに生き生きを通り越してぎらぎらしている。欲ってこわいもんだとつくづく思うベネットナシュである。

「なんとかしなくちゃなんとかしなくちゃなんとかしなくちゃなんとかしなくちゃ」

ぶつぶつと呪文を唱えながら行ったり来たりしているテクトリは目がすわってしまって、まるで魔法使いのおばあさんである。こんなとこローカパーラさまに見られたらまずいんじゃなかろうかと考えたベネットナシュは、なんとか話題を変え、テクトリの感情の矛先を変えようとした。

(なにかないかなにかないかなにかないかなにかないかなにかないかなにかない)

しかしまるっきり思いつかない。双方でぶつぶつ言っているだけで、時はむなしく過ぎていく。

「ベネットナシュ！ その娘の名は！？」

「え——知らない」

「とっとと行って調べておいで！！ あたしは娘に呪いをかける方法を考えるんだから！！」

しかしテクトリとベネットナシュがああでもないこうでもないとこねまわしているうちに、娘はご懐妊あそばし、あれよあれよという間に正后の地位を獲得してしまった。

ベネットナシュはうっかり「積極的だねえローカパーラさま」と感心して首を絞められた。

この先は熱心な読者諸氏はご存知であろう。わるい魔女(テクトリ)があの手この手で正后を陥れ、身ごもった子供もろとも、追い出してしまったんである。

ローカパーラがある女性に強く心惹かれているようだ、という噂を耳にした。  
どんなひとなのか。

ローカパーラは強力な結界を張り巡らせてそのひとを護っていた。彼はただ、愛する人を、ふたりきりの世界を守ろうとしただけだった。あらゆるものを遠ざける強さで、あらゆるものからの干渉を遠ざけた。生涯ただ一度だけのこと、と彼が感じたからだった。このうえなく特別なひとであり、特別な時間であると感じた故の処置だったのだが、『あらゆるもの』には神々も含まれていた。そのことがのちに大きな悲劇を生むことになるのだが、幸福の絶頂にいる彼が知る由もないことである。

「こんなことはかつてなかった」と、周囲の人々は口々に言いあつた。そして人々は声をひそめた。「ローカパーラさまは恋をしておられる」

声をひそめたものの、それは人々にとって、わくわくするできごとだった。心が沸き立ち、空気はかぐわしく、空は虹色に輝いていた。

「……見よ……婚姻のエネルギーが祝福しておる」

それはローカパーラの王国だけでなく、地上をも祝福した。雨雲が切れ、その隙間から射し込んだ陽の光で穏やかな海面はきらきらと輝いた。

新しい生命の受胎によって、天も地も光り輝いた。ローカパーラの結婚は新しい人類の誕生そのものだったのだ。

見る者すべてが感激する光景だった。世界は美しい。

イリチヤにしてみれば、この男がのちの冥界王であり、己の父親なのだろううす気がついてはいた。「おまえはわが子である」との言葉はこの男本人からのものだ。物的証拠もあった。その証拠の品は彼の美しい額にかかった白銀の髪を透かして、金と緑の光を放っていた。

そしてここへ来て、己の母親の存在をも知ることになったのだ。

だが——ローカパーラの幸福は、思わぬところから崩れ始めた。

熱愛するきさきが身ごもっているのは、だれか別の男との子だという、晴天の霹靂のごとき噂。何故、根も葉もない噂を受け入れてしまったのか。

皮肉なことに、彼が挫折を知らない清らかな存在だったからかもしれない。清らかなあまり、一粒の疑惑の種子は何の抵抗にも遭わずに、清らかな土壤に瞬く間に芽吹いてしまったのだ。

342.

はたして、天使のようだったローカパーラの面からは笑みが消え、イリチヤに疑惑の目を向けだした。

「そなたはいったい何者だ。何故、余のきさきと同じ顔をしているのだ」

「ぼくはイリチヤだって、最初に名乗ったでしょ！ あなたの庭にどうやって入ってしまったのか、わからない、って！ わかるまでここにいればいいとあなたは言った。でもどこを探しても出口が見つからない。ぼくは困ってるんだ！」

「あなたのおきさきさまと同じ顔をしてるって？ 知りませんよそんなの！！」

バラムはうろうろとその辺を歩きまわった。両手が空いていたら頭を抱えたかもしれない。

「イリチヤイリチヤ、彼の心は傷ついているんだ。ハートブレイクなんだ。いまにも壊れそうなんだ。刺激しちゃダメだ」

「んなこと言ったって！ 絡んできたのは向こうだよ！ だいたい、おきさき追い出したのは自分じゃないか！ ハートブレイクもへったくれもあるもんか！！」

「そうなんだけど。彼の心は血を流している。医者が必要なくらいに」

「医者？ レル・ヴァリスみたいな？」

「彼は外科医だろ。むしろ、アレクサンドラさまだ。彼女はこの手の心理に詳しい。趣味でこの手の詩をたくさん書いてた」

「……そうなの」

「彼女の詩はベネトナシュに渡ったんだが、はてさて彼には解読できただろうか——いやそんなことはどうでもいい、問題はこのお方だ。

考えてみて、イリチヤ。冥界の底で、テクトリたちが巨人族を勝手に作ってたって知った時の彼の怒りを。今となってはローカパーラさまと巨人族の間に深い交流があつたんだとわかる。どんなものかはわからんが、言葉にしがたい懐かしい懐かしい思い出として彼の中にしまわっていた。それを汚されたと知った怒りだったんだ。彼は本来、そういう温かい心を持った人物だったんだ。

じっさい、ついさいきんまでそうだった。彼は大事なものを失って、変わってしまった——おそらく——この事態が取り返しのつかないもので、原因は他人のいうことに耳を傾けてしまった自分自身にあるって、心のどこかで気がついたやつ——」

「そうか。わかった」と、ローカパーラは低く言った。「そなたはきさきの顔をして余を責めにきたのだ」

「なんでそうなるんですか！！！！！」

\*

それはまさに、ローカパーラが自責の念に駆られている証拠だった。

あのポータルをあの場所に置いてはおけない。誰からともなくそういう話になった。あの場所とはパリのケ・ブランリー美術館のことである。

大都会パリのど真ん中に冥界との通路が口を開けているわけだ。誰かが誤って入りこんでしまわないとも限らない。

「ええいまどろっこしい！！ 間違って誰かが入っちゃったらどーするんだってはなしだろ！！」

「河合の言う通りだ。イリチヤ以外の者が入りこんでいないという証拠はないのだ」

「だから！ おっさん！ 二重否定はやめてくれって！」

この『おっさん』とはどうもそりがあわないと常々思っている河合ヤスオである。本家のユミコおばさんの婚約者なんかでなかつたら近寄りたくない、自分で二重否定しておいて、自分でまどろっこしがっている。

話は脱線するが——

ユミコおばさんがポルタアウレアへ移住するにあたり、河合ヤスオに思わぬ商機が訪れた。ことの発端はレル・ヴァリス医師が「日本のラーメンはひじょうに美味しい！」と吹聴したことについた。よくよく聞いてみれば、日本の水つ早町という町で、店の名は『KA-Y』……

「あら。水つ早町の『KA-Y』は、店舗、商品とも、あたくしがプロデュースしたんですよ」

「え」

「お客様に喜んでいただけて、なによりですわ、ヴァリス先生」

熱心な読者諸氏はご存知だろう。水つ早町には"かわい"の名のついた飲食店がごまんとある。元々は小さな温泉宿だった河合がそこまで発展したのは河合保ノ助氏が竜門渕家と縁を結んだゆえである。

そんなわけで、ポルタアウレアにもラーメン店を、という話になり、河合ヤスオは現地の権力者の顔色をうかがっているのだった。権力者当人も実は食してみたくてうずうずしていたが、そんなところではない。初のラーメン店をどこに置くかより、冥界との接点をどこに置くかを考えねばならない。

元在った場所、中米ルカティマに戻すか、しかし、移送中に何か起こらないとも限らないという懸念が。そこで識者にアドバイスを求め、浮上したのがほかでもない。ポルタアウレアだった。

"識者"は言った。地上で最も波動の高い土地、そこにて封印せよ、と。  
すなわち、ポルタアウレアである。

そこまで断じられてしまえば、ぐうの音も出ない。権力者は『地上で最も波動の高い土地』の栄光と『厄介モノ』のはざまに立ち、不承不承、了解した。

そして"識者"が現地入りする。手ずから封印の儀を執り行うために。

344.

「えらいこっちゃ！」

"識者"は興奮した。まさか「この年でこんな冒険に関わろうとは！！」

「お父さん、落ち着いて！ これはゲームじゃないのよ！！」

熱心な読者諸氏はもしかしたらお気づきだったかもしれないが、おそらく一番驚いたのは実は、"識者"の娘だったひろである。そう、間宮宮司が"そのひと"だったのだ。

「師よ。ようこそ」

ラウレンス氏が神妙に遇している。ラウレンス氏の師といったら、最高賢者・コモラ師である。

「いやいや。や、健くんも真も、久しぶり。お、ひろや、いずれ母さんもこっちへ来るから」

「——どういうこと！？ 間宮神社は！？」

「しかるべき人に譲ることにした。心配するでない」

「——こっちに住むつもりなの！？」

「うむ」

「え——」

「娘や。これは短期で済む話ではない。これはゲームじゃないと言ったのはお前ではないか。多くの力を結集せねばならぬのだ」

言うことははじめだが、態度はそこはかとなくそわそわしているのだった。

「コモラ先生……」

「ヒューダー……まったく、なんという縁だろう、なあ！」

「おじいちゃん、どうして泣いてるの？」

「ははは。真や、ちょっと見ぬ間に大きくなつたなあ！」

345.

ケ・ブランリー美術館は、ポルタアウレア公国皇太子そのひとからの申し入れに、生唾を呑む思いで、例の人の背丈ほどもある石製仮面を譲るのに同意した。皇太子殿下はありのままに語つた。

「ご存知のことと思うが、先般、館内で拘束された者がいる。それはH&L財団から石の仮面の調査のために派遣された人間であり、私の友人だ。彼の連れが館内の同じ場所で消えてしまったのだ。いずれも、ルカティマから運ばれたというこの石の仮面の前で」

そして、

「このオブジェクトには強い呪いがかかっている。放置すれば被害者はさらに増えるに違いない。貴館もそのような事態は避けたかろう。

よって移動すべし。当面の呪いの発動を阻止すべく、"その種"の能力者をこちらで手配するから、そちらはなにもしなくてよろしい」

こうして、深夜のパリ、能力者たちの厳重な警戒のもと、ケ・ブランリー美術館からオブジェクトは運び出され、飛行機に乗せられた。この飛行機はH&Lの自家用ジェット機である。ポルタアウレアまで二時間そこそこ、最短の距離と時間での移送だった。

「よくぞ引き受けてくれた。バイスロイどの」

「なかなか緊張するものだな。しかし、貴殿が来てくれるとは……」

スクナは笑った。「来るさ。旧友よ。おぬしのためならば」

ポルタアウレアには彼の妹、コタエも来ている。単に旧交を温めるためではなく、戦力として。ほかにもバイスロイが名も知らぬスクナの仲間たちがポータル設置点で待機していた。

「正直、迷った。時間もない。心を決めた時は脂汗まみれだったのだ」

「そりやそうだろ。とんでもない厄介モノだもの」

「ちょっと信じられないことだったのだが、国民が、引き受けようと言ってくれた」

「そのことだが、今のポルタアウレアには、黄金門の皇帝とエウメロスのヘルガ王女と苦楽を共にした人々が多く転生している。緊急時には指導者の意を尊重し、協力する。指導者を独りにはしない。そうやって全員で苦難を乗り越えた。そういう経験があるのだ。

そして、バイスロイ、ポルタアウレアが黄金の保管庫に選ばれたのは、まさにそういう人々が暮らす土地だからなのだよ」

346.

イリチヤが持っているデバイスから送られてくる動画のサイズはすでに膨大なものになっている。受信している健のデバイスの容量をもとうに超えているはずだが、おかまいなしに受信は続いている。

おかしい。もしかしてイリチヤのいたずらにつきあわされてるだけじゃなかろうか。いったい通信料金はどうなる。おそらく天文学的な数字。H&Lの経費で落としていいだろうか等々、健の心労は計り知れない。

しかし冥界王と転送システム建造者との関係など、思いがけないことが浮上してきて目が離せない。いたずらとも思えない。

コタエは言った。「占星術の上で、冥界に降りた魂が真実を持ち帰るという特殊な星まわりがありますが、今がまさにその時。けっして偶然ではありません」

「イリチヤ(魂)は真実を持って帰ってくるのですね？」健はすぐるような目をコタエに向ける。

「ええ——たぶん——けれども、このローカパーラという人物、とても強い力を持っています。イリチヤがこの人物に同調したりすると——帰還は難しくなるかも——」

「この人物に？ 同調？」

「このふたり、基本的な波動がよく似ています。そのような場合、相対的に弱い方が強い方に取り込まれてしまいかねません」

健は愕然とした。場面はまさに、ローカパーラが追放したきさきとイリチヤの容貌の類似に疑念をいだいたところだった。

（波動が似ているのは親子だからだが、いや、それ以上に、イリチヤの身が危ないのでは——おきさきのように追放されてしまったら——）

足元をネコがうろうろと落ち着きなく歩きまわっている。河合ヤスオがブリュッセルから連れてきたバランケ。

（バランケ、おまえもバラムが心配なんだ——）

36・「Lokapala's Marriage】

37・「」へ続く

## あとがき

思えば、『Salamander in ~』はローカパーラとミツハの出会いから始まってるんでした。当時はローカパーラという名前もなかった。遠くへ来たもんです。ちょっと、感無量。

先日から読んでる『110の種族と未知なる銀河コミュニティへの招待』には驚くようなことが次々と出てくるのですが、そのひとつが血液型についてです。

じっさい…ネアンデルタール人はほぼA型、クロマニヨン人はほぼO型だったことがわかつていますし、アフリカではO型が多数派、古モンゴロイドもO型、古代インカ帝国では全てO型、現在も世界的にみてO型が多い印象です。

『110の種族と～』（情報提供者は次元間インプラント技術の専門家）によると、地球上、いくつもある血液型の中で、O型だけは地球外起源。地球のではない、と。

ちょっと衝撃的に過ぎるし、真偽の確かめようがない。書くべきじゃないかも。だったら書くな。しかしまあ、興味のある方は本の469pを読んでみてください。

2025年11月25日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十六章 Lokapala's Marriage

2025年11月25日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社